

『ひな祭り会』

5年前の1月5日、私は夢と希望を抱き、この病院に初出勤の日を迎えた。しかも、今までと違って、単なる一医師としてではなく、院長としての赴任である。いったい、職員の皆にどんな形で迎えられるのだろうか、という不安と期待の中、病院に向かった。病院の外来患者数はそれほど多くないと聞いていたが、8時だというのに既に駐車場は半分以上、車で埋まっていた。「思ったより患者さんが来てるんだ」と妙に感心した一瞬であった。しかし、病院の中に入ったその時から、私の夢と希望、そして期待はもろくも崩れ去った。

当時は土足厳禁であったが、私の下駄箱は準備されていなかった。ある職員に聞くと、「適当に空いているところを使ってください」と言われた。寂しい一言だった。院内を歩いていても、皆よそよそしい顔をしているように見えた。有難かったことに、外来看護師の2人は診察室を片付けて、診察しやすいように準備をしてくれた。細やかな配慮によりやく心が和んだ。診療が始まったとはいえ、ぼつりぼつりとしか患者さんは来なかった。先ほどの駐車場の車は全て職員が駐車しているということが、その時点で分かった。

院長という立場で赴任するということは、さぞかし特別に出迎えられるのではないかと、といった

私の大きな勘違いが、いっそう落胆を大きくしていた。そして、もやもやした気持ちの中、毎日が同じように過ぎて行った。夜遅く、ぼつんと医局に一人ぼっちでいる時は、言い知れない不安と孤独感に打ちのめされそうになった。「院長なんか、別になりたいわけではなかったのに！止めれば良かった。」と自らの選択を正直悔やんだ。そして、もうホスピスを作るなんて、夢のまた夢。温めてきた夢がどんどん遠のいていくように感じた。

時とともに、私がどういう立場なのか、どういう理由でこの病院に来たのか、この先生にどう接していいのか、これから自分たちはどうなるのか、職員の皆も不安と戸惑いの中にいることがよく分かった。半ば卑屈になっていた自分を恥じた。そして意を決して、1週間後、全職員を談話室に集めて、所信表明を行った。ここで、自己紹介をして、何故この病院に院長として来

ることになったのかを説明した。さらに、率直に、この病院の印象を述べた。そして、病院の名称を渡島病院から函館おしま病院に改称すること、「癒し癒される心からの医療」という理念を掲げ、ホスピス理念で病院を運営することを皆に伝えた。職員の中で、何人がうなずきながら聞いてくれているのが分かり、私はようやくこの病院に来たことが少しは認められたのか、と感じた。「ホスピスは作ることはできないかもしれない。それならそれで、ホスピス理念を実践する療養型病院でもいい。」夢をあきらめたわけでは無かったが、私はそう自分に言い聞かせていた。



2つの病棟には、高齢者の方が長期にわたり入院していた。病状的には安定しているようだったが、ほとんどの患者さんがベッド上で寝たきりの状態となり、食事と入浴以外に生活の中でこれといった変化も無く、過ごしていた。毎日が単調に流れ、皆がそれに慣れてしまっていた。

ある日、「ひな祭り会をやろう！」と全職員に投げかけた。皆の反応はそう悪くなかった。院長が言い出したことに、皆が乗ってくれた。2月28日午後、全職員によるひな祭り会が行われた。ほとんどの患者さんが談話室に集まり、職員も病棟スタッフだけでなく、事務職員、厨房からも参加してくれた。ボランティアとして私の妻、親友の妻、同級生とその友人が手伝ってくれ、さらには新聞取材もあり、一大イベントとなった。

会は病棟スタッフの踊りで始まり、患者さんの歌披露、そして最後に私もギターを弾きながら、「七つの子」と「ふるさと」を歌い、締めくくった。患者さんから一様に「楽しかった」と嬉しい言葉をもらった。数人の方が涙を流されていた。とりわけ、いつも笑顔のTさんが「ありがとう、ありがとう」と大粒の涙をポロポロ流しているのには、私も胸が熱くなった。「やって良かった」職員からも肯定的な言葉が聞かれた。渡島病院から函館おしま病院に名称を変え、新しい理念を実践する記念すべき第一歩であった。

あれから5年。今年もまたそれぞれの病棟でひな祭り会を企画しているという。今では、私の出番もめっきり少なくなり、患者さんと一緒に楽しませてもらっている。あの時の患者さんの表情、言葉、そして涙が原動力となり、病院は大変貌を遂げることができた。「癒し、癒される」私たちは本当に患者さんから日々パワーをもらっている。そのことに、いつも感謝している。

